

言の樹の下

梶原佑心

言葉だ

あなたが

忘れてしまったという思い出の一片は

たとえば

窓辺に

光が 讚美詩を連れて訪ねてくれた朝のこと

*

形 香り 緑あおの力づよさ 棘とげの有無
すべてが同じようで 違う 舞う
.....

ときおり 嵐に

言葉達は 悲しがつたり暴れまわったり する

言葉を踏みつけ 言葉に撲うたれてよろめいて
辿り着いたのは 孤独な樹の下

*

しづかな大樹その幹に 寄りかかり

深い呼吸をしたのなら

光が もう一度だけ そつと瞼まぶたをとざしてくれる

臀部でんぶから 根の生えのびる感覚に

あくびして

夢を見る ここらが幸ある森となる 夢を